

1970年夏のヨーロッパ

—海外旅行のすすめ—

原爆放射能医学研究所 横路 謙次郎

私はこの原稿を今、デトロイトからボストンへのノース・ウエスト航空392便のエコノミー席で書きはじめています。もう30分あまり、午後11時にはボストン着の予定です。事の経緯は1月18日（明日）からボストン郊外のケンブリッジ市の本部で開かれる IPPNW（核戦争防止国際医師会議）の執行委員会に出席するために17日午後、大阪空港を発って、ロスアンゼルス、ミネアポリス経由で、午後9時30分にはボストン着の予定で、IPPNWの職員が出迎えてくれることになっていました。ところが運悪く、中東開戦の当日です。17日朝のニュースで開戦を知りましたが、大阪空港を発つ前、念のために広島県医師会にある IPPNW 日本支部に電話をしますと、つい先刻、オーストラリアの代表から、「戦争が始まったので危険を冒したくないので自分は執行委員会への出席をとりやめる」とのファックスが入ったとの事で、やはりそうすべきなのかなとは考えましたが、まさかイラクからのミサイルの打込みはないだろうと、いつものオプティニズムが頭をもたげ、とにかく予定通りということでロスアンゼルスへ到着しました。ところが、空港での入国審査と荷物検査が厳重をきわめ、そのため乗継ぎ便に間に合わず、やっと次の便に強引に乗り込み、やっと今日中に到着出来る見込みがたち、ホッとしているところです。

海外出張今昔

それはさておき、私は教育・実習の責を負

わされることの少ない原医研に在職したおかげで、ずいぶん度々海外出張、研修の機会に恵まれました。改めて数えたこともありませんが、学部においてはとても不可能であったろうと申し訳ない気がしないでもありません。しかし、反面、私は、特に若いころは一回一回の旅行をいろいろの意味で将来への投資と割切っていました。私の海外旅行は近年の1、2を除いては貧乏旅行も良いところですが、そこからたいへん多くの経験をし、研究の展開にも眼を開かせられました。それにしても以前の海外出張の手続きの煩雑さは相当なものでした。発令者が文部大臣ということで、数か月前から書類を作り、ピザも神戸あるいは東京の大使館に出向いて受給されるのが普通でした。私が昭和33年にはじめてアメリカのボストンへ留学した際の旅券の最後尾には持参した外貨の額が30米ドルと記してあります。外貨の手持ちが乏しく、厳しい為替管理を行っていた当時の日本政府は私にそれだけの持出ししか許可してくれませんでした。旅券はもちろん一回限りで、旅行のたびに申請しなければなりません。ちなみに数か月後に貨客船で太平洋を渡りボストンに到着した家内の旅券には「夫に同行して米国へ……」と記してありました。当時は現在と異なって、米国側の援助、例えばフルブライト基金はありましたが、文部省からの援助などはまったくありませんでした。それは取りも直さず私達2人は渡米直後から、

決して十分ではなかった私のサラリーから2人分の帰国旅費を捻出せざるを得ないという極めて厳しい現実に直面しました。しかし、そこは見るもの聞くものすべてが珍しく、充実した気力、体力に物いわせて何とか乗り切りました。研究は別としても、一生懸命応援したボストンマラソン、弱くて広島カープの生き写しのようなボストンレッドソックス応援、ボストンシンフォニー、ボストンポップスなどのすばらしい演奏など、楽しい思い出ばかりが心に焼きついて残っています。げに若さとは有難いもので、私の体験からしますと、海外留学、旅行は感性豊かな若いうちにしてこそ最大の収穫が得られると信じています。

1970年夏のヨーロッパ

私はその歴史、文化に惹かれるせいか、スエーデン留学を含めてたびたびヨーロッパを訪れています。ここでは中でも心に残る旅のあらましを書いてみます。1970年の夏にはヨーロッパの各地で3か月の間に私の研究分野に関連した4つの国際学会がありました。それらに参加することを決めた私はまず、それまでに私の発表した論文に興味をもって別冊を請求してきたヨーロッパの研究者にセミナーをやりたい旨を書いて片っぱしから手紙を出した結果、8人からOKの返事がありました。これは大切なことで、当時、西ドイツなどでは1回につき、200~300マルクの謝礼が相場でした。1マルクが140円くらいで、清潔で質素なホテルは一泊30マルクほどのものでしたから、その価値は大したものであるとともに、貧乏旅行にとっては必要不可欠でした。さらに以前から一度はと憧れていたシベリア経由の旅を試みました。その旅は、古い日記を繰りますと、6月13日朝、横浜港発のソ連船ハバロフスク号乗船でその幕が切っ

て落されました。1週間後にウィーンに到着予定の約20人ほどの団体の一員として参加しましたが、そのほとんどはヨーロッパアルプス登山をめざす2人組の若者や、バリ留学途次の血の気の多い若き芸術家の卵達（多くは武蔵野美術大卒業生）で、いわば、あまり懐中の豊かでない連中です。

私は最年長ということで団長にまつり上げられ、ナホトカまで約50時間かかる船旅からいろいろの対外交渉をまかされましたが、船の小さなバーでの信じられないほど安いウオッカとキャビアを腹いっぱい飲みました。ナホトカから夜行寝台車でハバロフスクまで行き、そこからアエロフロートのイリュシン162でモスクーまでの9時間の旅を楽しみました。とはいいいながら、椅子はガタガタ、窓ぎわには氷粒ができるわ、スチュワーデスともいえないピア樟のようなおばさんが、食事のトレイを投げてよこすやらでロシア流のサービスを満喫させられました。モスクーでは外貨献上のために馬鹿デカイ、ホテル・ウクライナに強制的に2泊させられましたが、感性の高い？美術学生はホテル周辺にその筋の女が徘徊していることを団長の私に報告してきました。旅の終りは2泊後の深夜、国際列車シヨパン号でのウィーンまでの長旅でした。その間、ポーランド、チェコスロバキアを通過しました。窓外には綿の花が飛びかい、南下するにつれて緑が多くなり、何となく開放された気分になる若者らと一緒に楽しい35時間を過し、横浜を発ってから1週間目の早朝、ウィーンに到着しました。やれやれと無事の旅の終わりにホッとすることもなく、団長としての最後の仕事が残っていることを知らされました。それは同行の若者達のウィーンからの目的地へのふり分けです。

彼等の得意なのは日本語のみで、東にして持っている切符をどう使ってよいか解らない誠な勇敢な集団です。君の列車は何時何分、第何番線からの発車ということをすべて確認したのは到着後1時間もたってからでした。それを終えた後、私は自分の終着先である西ドイツのフライブルグへの更なる10時間の汽車の旅をはじめ、夕刻に同地に安着しました。今から思えばよくもまああんな事と思えますが、これも若さのおかげでしょう。しかしもう一度繰り返そうという気はありません。

私はフライブルグに下宿し、そこをベースキャンプとして、フランスのエビアン、フライブルグ、ミュンヘン及びスエーデンのウプサラで開催されたすべての学会に出席、講演し、その間に訪れた西ドイツ、イタリー、ハンガリー、チェコスロバキア、東ドイツ、フィンランドなどで8回のセミナーもこなしまし

た。特に当時の東欧旅行は印象に残るものでした。それについて書きたいことが多くありますが紙面に限りがあります。そして、それらを通じて多くの経験と、今でも交流のある多くの友人を得ました。さらに3か月も家を空けて迷惑と心配をかけた家内にセミナーのおかげでおみやげを買うことも出来ました。旅の最後はフィンランドのヘルシンキでした。セミナー後に北上して初秋の湖沼地帯を訪ねるつもりでしたが、ある朝、急に里心がついて、数日の予定をカットして約3か月の旅を終えて帰広したのは9月15日でした。

以前とちがって、現在は海外旅行もお金さえ工面がつけば気軽に楽しめます。私も退官後は今までの一人旅の罪滅しに、旧友を訪ねての家族旅行を楽しみたいと思う今日このごろです。



文藝春秋社出版

文藝春秋社出版

文藝春秋社出版

